

オーガニックコットンを用いた人形制作のワークショップ。種が入ったコットンのかたまりを手で組み合わせる。



完成したコットンパイプ(人形)。すべて表情が違う

ボランティアの皆さんによって手入れされる綿畑。栽培しているのは日本在来種の茶綿だ



鮮やかなイラストが目を引く古着回収トラック

NPO法人 ザ・ピープル

ただいま
活動中

余ったものを
足りないところへ。
「衣」と「食」の活用

するプロジェクトへと発展した。さらに、流通に乗らない余った食品を、企業や個人、生産者から提供してもらって寄付するフードバンクを18年度から始めた。「衣」と「食」の両面で廃棄物を削減し、生活困窮者を支援する「フード&クロージングバンク推進事業」は、セブーンイレブン記念財団の助成を得ておこなわれている。

「食についても、古着のノウハウとネットワークを生かしてリサイクル支援をしてほしいという話を受けて始めました。驚くほどの生活困窮者がいらして、この活動はもっと必要になるんじゃないかと、衣と食の両面で活動していくことになりました。パートや年金で暮らせない母子家庭や高齢者とは社会と生活についていっそう考えるようになりましてね」(人見さん)

現在は「衣」と「食」を柱に、綿花栽培などの復興支援事業、海外への支援事業、古着を使った布ぞうり教室や演劇とショーのイベント開催など、多彩な活動を展開している。団体のメンバーは約50人に増えているが、次世代への後継と人材育成が課題だ。「運営する店舗が地域の交流の場にな

1ヶ月、月に20tの古着が集まるといふ。倉庫に積み上げ、状態を調べて店舗販売用、バザー用、素材リサイクル用に振り分ける。状態がいい古着は運営するチャリティショップやバザーに出し、使えないものは車の内装材などにリサイクルしたり、エコバックや布ぞうりにリメイクする。集まった古着の9割を再資源化しているが、それでも焼却・埋め立て処分となる残り1割をゼロにするのが目標だ。長く続けるうちに市外にも回収地域が広がり、全国から古着が寄せられるようになった。

古着リサイクルがメインだった活動は、11年3月に発生した東日本大震災によって変わった。ボランティア活動に長けていたメンバーは、冬物の衣料支援で避難所を回り、ボランティアセンターを設立した。12年度からは、津波による耕作地の塩害と、原発事故に伴う風評被害に苦しむ農家を支援する目的で「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」をスタート。地域コミュニティの急激な変化のなかで分断といった課題も生まれていたため、塩害に強い綿をみんなで育てて、地域経済の回復と住民の交流を図ろうと呼びかけ、幅広い地域や世代の人々が参加している。販売するのは中高年向け衣料を主とし、若い人向けの衣料は素材リサイクルに回していたんです。若い人に入ってきてもらいたいので、若者向けの衣料の販売を増やし、倉庫をリノベーションしていく計画です。

NPOは、個性や得意とするところを發揮できる場だと思います。30年以上活動するうちに、古着といえばピープルと浸透、定着してきました。長く続けてこられたのは、活動が必要とされてきたからだと思います。全国から古着が寄せられ、フードバンクを始めたら食品を持ってきてくださる方がいる。皆さんの賛同があつてこそで、必要とする方がゼロにならない限り続く活動なんだと思います。それを後継していけるよう、若い人に参加してもらいたいと考えています」(人見さん)

今日も服がこんなに集まった、もっとならないね、と声をかけあいながら、リサイクル精神とボランティア精神で活動している。活動とともに会話が生まれ、地域の魅力も増す。「衣」と「食」を柱に、ザ・ピープルのメンバーは毎日元気に行動している。



今年3月に主催したイベントでは演劇「東京大江戸これくしょん」を上演。衣装にはいわきの古着が使われ、地元県立高校の生徒たちが特別出演した



地元の銀行の入り口に設置されたフードボックス

首都圏の様々なイベントに出展し、フードライブ(家庭の余剰食品を寄付する活動)を呼びかける



子供服ばかりを集めた「おさがりバザー」は子育て中のお母さんから大好評。子育て支援にもなっている

16カ所に設置された回収ボックス(右)と、そこから集められた大量の古着を倉庫で仕分けするようす。リユース・リサイクル率は驚異の90%だ

